

多摩川流域の後・終末期古墳

7世紀における東国地域の動態

Burial Mounds in the Tama River Basin in the Late or End Kofun Period :
Dynamics of the Togoku Region in the 7th Century

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

①研究史

②多摩川中・下流域の首長墓

③多摩川上流域の首長墓

④鶴見川流域の首長墓

⑤多摩川上流域の群集墳

⑥多摩川流域の古墳時代後・終末期首長墓の動向

おわりに

【論文要旨】

多摩川流域首長墓の変遷には二つの画期が認められる。第一の画期は6世紀末ごろから7世紀初めごろで、中・下流域では前方後円墳が終焉を迎える。同時に切石積みの横穴式石室が数基つくられたが、それらは直径20m未満の円墳で、多彩な形式が並立していて統一性がなく、首長層の強固な結びつきは看取できない。第二の画期は7世紀中ごろで、それまで首長墓がなかった上流域に、北武蔵地域の切石積み胴張り複室構造の横穴式石室が複数出現し、つづく7世紀後半から末ごろには中・下流の右岸域にもひろがる。それらは一定の約束事にもとづく共通性をもっていて、首長層のイデオロギー的な一体性、〈われわれ意識〉や集团的帰属意識が読みとれる。

7世紀中ごろに、北武蔵地域から首長層が多摩川流域に移住した。北武蔵から南武蔵へ政治センターが移動したのである。それは、多摩川水運ならびに武蔵地域と相模地域を結ぶ「東山道武蔵路」の体系的な整備や、多摩丘陵のゆたかな資源の開発を目論むものであった。ただ、そうした政治的かつ経済的営為が、多摩川流域だけのダイナミズムで生じたとは考えにくい。北・南武蔵地域や相模地域に利益をもたらす地域の開発には、高度な利害関係の調整が必然的になってくる。在地首長を超える上位の権力、すなわち中央権力が発動されねば実現しがたい。

新しい政治センターを担った北武蔵地域の首長層は、伝統的な墓室をつくりつつも上円下方墳・八角墳といった特異な墳丘形式や、版築工法・堀込み地業など寺院建立技術を採用した。それは既往の地域での結合を保持しながら、中央とつながって時代を革新するという、在地首長層の新たな力学をあらわしているようにみえる。

【キーワード】 切石積み石室、胴張り石室、変質した古墳概念、多摩川水運、政治センター